

英国人宣教師 M.A.バーネットの生涯

―大正・昭和の「中央日本」開拓伝道と福音伝道協会の形成―

福田 博美

キーワード

聖書のことば 信仰宣教団体(Faith Mission) 貧しい労働者 戦争

要旨

本研究ノートは 1917 年 12 月に日本伝道隊の宣教師として来日し、以来 34 年にわたり栃木、群馬、埼玉県など「中央日本」の宣教にかけた英国人女性 M. A.バーネット(Marguerite Amy Burnet)の生涯を明らかにする。

バーネットの宣教師としての活動は栃木県足尾に始まり、ここで生まれたビジョンにより、自身の手で設立した The Central Japan Pioneer Mission により拡大した。彼女が伝えたキリスト教は「聖書のことば」をそのまま「神のことば」として保守する伝統的な福音主義に根ざすもので、戦後「福音派」と呼ばれるプロテスタントキリスト教の一元流となった¹⁾。本稿の作成にあたっては、主に The Central Japan Pioneer Mission の宣教報告「The Central Japan Pioneer」、およびバーネット自らが前半生を綴った「AN AUTOBIOGRAPHY」を使用する。現在両史料とも福音伝道教団境キリスト教会牧師岡部高明氏が保管している。



M. A. バーネット (70 歳頃)『福音宣教 60 年の歩み』(福音伝道教団)より

はじめに

1951 年 7 月 2 日前橋市百軒町(現在の朝日町)445 番地の宣教師館で一人の英国人女性宣教師が地上の生涯を終えた。名は M.A.バーネット、72 年にわたる生涯のおよそ半分を群馬をはじめとする「中央日本」の宣教に献げた²⁾。

バーネットの働きは自らの手によって 1925 年 5 月イギリスで結成した The Central Japan Pioneer Mission (中央日本開拓伝道団(以下 C.J.P.M.))を通じて行われ、開拓伝道の結果誕生した教会は日本人の団体、福音伝道協会(以下「協会」)を結成した³⁾。バーネットが伝えたキリスト教の特徴は C.J.P.M.の宣教報告「The Central Japan Pioneer」(以下「C.J.P.」)の「原則(Principles)」に外国人、日本人に関わらず働き人(worker)に「原典において聖書の逐語靈感(the verbal inspiration of the Bible in the original manuscripts)を疑いなく信ずるこ

とを宣言すること」を求めると端的に表現されている⁴⁾。これは「協会」の「教義」にも、聖書は「皆原語に於て逐語靈感と信じ、之を信仰の基礎とす」と示されている通りである⁵⁾。さらに「原則」では聖書に示された「処女降誕や私たちの主イエス・キリストについての神性にかかわる本質的なことで、イエス・キリストの身代わりの贖い、復活、天に挙げられたこと、ご自身のもとにご自分の民を集めるべくやってくる個人的再臨」を信ずることを宣言することとした⁶⁾。そこで本稿は伝統的に「神のことば」とされた「聖書のことば」そのままの記述を改めて宣教の「原則」に掲げる彼女の生い立ちから論を起すこととなろう。バーネットが来日した 1917 年 12 月 6 日は第一次世界大戦終結前であり、戦争終結後の国際協調から世界大恐慌を経て、再度世界戦争の時代へと移り変わる。これは故国イギリスと宣教地日本との戦争に至る過程でもあった。この激動の時代彼女が信ずる「聖書のことば」によってどう歩んだか、戦後宣教の道筋をも含め考察する。

1 生い立ちと信仰

(1) 「聖書のことば」のゆらぎ

来日までのバーネットの歩みを第二次世界大戦下の日本で自ら書いた「AN AUTOBIOGRAPHY (自伝)」(以下「」*は「自伝」のからの引用)により検討する⁷⁾。

バーネットは 1878 年 11 月 24 日イングランド東部ノーフォーク州ノーリッジ(Norwich)で英国教会(聖公会)牧師ウィリアム・バーネット(William Burnet)の一人娘として誕生した⁸⁾。父は「非常に強いプロテスタント」*で、プロテスタントの新聞の編集者でもあった。父の転任に伴い 2 歳で同州クリムプレシム(Crimplesham)に移り、3 歳の頃から教会の礼拝に出席、「長い礼拝であったが好きでした」*と父の「単純な説教(a simple preaching)」*を好んだ。この時教会内の「地主の家族の椅子には赤い膝掛け布団と座布団はもちろんのこと壁炉(fireplace)が準備されてい」*ることに目を向けている。9 歳でフランス北部のリール(Lille)に移った。この頃心にある罪を知り、赦しを求めて神に祈るようになる。ここで学齢期を迎えたバーネットは主に家庭教師から学び、12 歳で当地の事情でカトリックの私立学校に入学、その信仰は好まなかったが、学校の「道徳的靈的雰囲気はそれまで知った中で最も心地よく清いもの」*と感じ、そしてよく学んだ。在学中に母を亡くし、この頃から叔父や従姉妹の影響でアングロ・カトリック(Anglo-Catholics)の教会にも通うようになる。それは父のような「信仰によって単純にみことばから恵みを受け取る」*福音主義キリスト教(evangelical Christianity)よりもアングロ・カトリックの「特に聖餐式のパンとブドウ酒にキリストの現実の存在がある、あるいは実際に同等の全質変化があるという教理」*などに心惹かれたからという。

父の転任により 15 歳でイギリスに戻り、ロンドン東方 20 マイルにあるエセックス州のチルダーディッチ(Childerditch)の村に住み、近く町ブレントウッド(Brentwood)の私立学校に 3 年間通った。1893 年頃の入学であろう。しかし、この学校は「世俗的な高教会(High Church)のようで、助手の先生は明らかに現在では近代主義者(a Modernist)とされるべき考

えを持っていました。自分が受け持ったさまざまな学科を正統的信仰 (the orthodox faith) に関して疑問を呈することのできる全ての機会として用い」*たという。これは「公然となされたのではなく、おそらく故意でもありませんでしたが、日々注入された知的な毒の一滴一滴はとても有効で全て死に至る仕事」*であったと振り返る。助手の先生の考えに惹かれ、この頃から「高等批評 (Higher Criticism) や他の近代主義のテーマの雑誌記事を読む」ようになった。19 世紀末のイギリスの教会では、正統的信仰とされた「聖書の無謬性を主張する者」はごくわずかしきかず、「1900 年ともなれば、慎重な学者も皆、ためらうことなく聖書批評学の主な成果を受け入れ」たとされる⁹⁾。とすれば「正統的信仰に関して疑問を呈する」*助手の先生の主張は当時の主流の考えであった。パーネットはその後ロンドンカレッジ (the London College) に入学、教員免許を取得し、教師見習いの後、25 歳頃からチルダーディッチの村の学校責任者 (Headship) として働いた。しかし、子どもたちの指導に当たり「自分の持っている信仰が全く力のないものであることに気づい」*たという。

(2) 「聖書のことば」の発見と宣教師への道

26 歳となる 1904 年 8 月、父親の留守中の代理牧師として訪れたロクム・テメンス (Locum Temens) 夫妻との出会いが、パーネットの人生に大きな影響を与えた。夫はインドの牧師 (Indian Chaplain) で、夫人は英国ゼナナ宣教協会 (Church of England Zenana Missionary Society (C.E.Z.M.)) の宣教師としてインドのパンジャブで働いていた¹⁰⁾。特に夫人は訪れて以来外国伝道について話し、彼女に宣教師になることを勧めたという。パーネットは「6 年間の苦しい宣教活動の中で一人も悔い改める人が起こらず、自分の健康も損なわれたのに少しも落胆して」*いない夫人の姿に惹かれ、その信仰に関心を持った。その後宣教師夫人が残していったリーダー・ハリス夫人 (Mrs. Reader Harris) の『Spirit Pictures』という本を読む¹¹⁾。これは「聖霊の満たし (the Filling of the Holy Spirit) はどうしたら見いだせるか」*という聖書研究シリーズの一冊であった。読んだときのことを思い出して「私は跪いて本に書いてある三つのステップを行いました。第 1 に神に無条件に降伏しました。このことは数日前にしたことでしたが、更に深く心の中の思いにおいても全く降伏しました。第 2 はローマ人への手紙 6 章、ガラテヤ人への手紙 2 章 20 節にあるように、自分はキリストと共に十字架につけられ葬られ、よみがえらされたものだと言算しました。このことは充分わかりませんでしたが、おことば通りにしました。第 3 はルカによる福音書 11 章 13 節に基づいて聖霊を求め、その方が私のうちに入れられたことを信じ、聖霊が占領してくださったことを感謝しました。以上のことは私にとって本当に新しい光でした。なぜなら今まで何か神秘的な経験によってわかると思っていたのに、ここには神のことばをただ信じて安息することが書かれてあったからです」*と述べた。この体験により「聖書は新しい本となり、祈りは楽しいもの」になったという。「聖書のことば」をそのまま「神のことば」と理解した瞬間でもあった。この「聖霊が占領」*した体験を「聖霊の満たし」あるいは「聖霊の盈満」と呼んだ。そして福音主義的宣教師 (evangelical missionary) の雑誌記事

や本を読むうちに、中国、インドや日本のような「偶像礼拝の世界に対して聖霊の力と働きが示され、真の悔い改めと新生が生じるのは」*ロクム・テメンス夫妻のような聖霊の働きを重んじる「霊的福音主義者(the spiritual evangelicals)の働き」*と理解した。

宣教師への願いを持ったバーネットは「父を一人残して外国に行くことは神の御心ではない」*と考え、その牧会を助けながら海外宣教を支援するために活動した。まず英国聖公会宣教協会(The Church Missionary Society (以下 C.M.S.))を支援、続いて 1907 年、友人と「外国宣教のための執り成しの月例集会(a monthly Intercessory meeting for Foreign Missions)」*をつくり、超教派のさまざまな信仰宣教団体(Faith Mission)の代表を招いて講演会を開催した¹²⁾。その中に日本伝道隊(the Japan Evangelistic Band(以下 J.E.B.))があった¹³⁾。1908 年頃から日本への関心を深め、日本に関する宣教師の学習会も指導した。1912 年には父の牧師引退を期に彼女は学校の教師を辞め、イングランド中部のレスタシャー州レスター(Leicester)に移り、教会のための C.P.A.執事(C.P.A.Deaconess for Christ Church Leicester)として学生時代からの念願であったスラム街で働いた¹⁴⁾。「ここでの 5 年間で私の外国宣教のための訓練を完全なもの」*にしたと述べている。1915 年にはダービーシャー州ソニック(Swanwick)で行われた J.E.B.の聖会に初めて参加、「内住の罪から全く救われる(the full deliverance from indwelling sin)」*「聖化」に関わる新たな体験により「ヨハネの第 1 の手紙 1 章 7 節、ガラテヤ人への手紙 2 章 20 節の豊かな意味(the full meaning)を本当に理解」*したという。1917 年 4 月、父は 84 歳で死去、故国での役割を終えたと考えたバーネットは、宣教師となるために祈り、その結果 38 歳の自分は「肉体的に苦勞する国よりも、霊的、道德的、知的にむずかしい国」*が適切であるとして J.E.B.を選択した¹⁵⁾。同年秋リバプールから船出し、カナダ経由で横浜港に到着した。航海中にアメリカの聖公会の宣教師アプトン(Miss Upton)と親しくなり、彼女の任地埼玉県の宣教の必要性を知った。来日途上 39 歳の誕生日を迎えていた。

2 日本宣教開始

(1) Glynn Vivian Miner's Mission の宣教地栃木県足尾

来日後バーネットは一時東京の赤坂氷川町に滞在し、日本語を学び赴任にそなえた¹⁶⁾。後に「C.J.P.」創刊号に載せた「The Central Japan Pioneer Mission. A PERSONAL TESTIMONY.(以下「証」)」(以下「」*はこの「証」からの引用)で最初の赴任地足尾について次のように述べている¹⁷⁾。

足尾のことを聞いたのは 1918 年秋頃で、そこは「辛く、健康に害を及ぼす気候であり、他の宣教師達との交わりから全く孤立したところ」で、「日本にあるすべての場所の中で、そこはもっとも行きたくない所」*と感じた。彼女自身「頸部に病患を持つておられたので、寒さに弱く、毎年のように冬期には気管支炎などを患」うなど余り健康とは言えなかった¹⁸⁾。しかし足尾の「多くの人々は荒々しく惨めな身分」*でロンドンやレスタシャーのスラム街を思い出させたのだろう。祈りと葛藤の末、1919 年春の兵庫県有馬温泉で行われた

J.E.B.の年会で足尾行きを決意した。当時足尾の赤沢にはグリーン・ビビアン鉱夫宣教団 (Glynn Vivian Miner's Mission (以下 G.V.M.M.)) の資金で建てられた教会堂があり、J.E.B. 派遣の日本人伝道者が働いていた¹⁹⁾。決意 6 ヶ月後の「非常に寒い雪の日」※に足尾に到着、通洞駅近くの天徳旅館を住まいとした²⁰⁾。1920 年 3 月には大阪天王寺から J.E.B. の市村好恵が来足しバーネットを助けた。「身には質素なサージの服を纏われ、食事も摂取量も時間も厳守され、牧界教会への奉仕の為旅する時は必ず辨当と共に水筒は持参」する質素で堅実な宣教師としての生活であった²¹⁾。

ところがバーネット到着の頃、足尾の人口は第一次世界大戦後の不景気のため激減、彼女の思いは解雇されたクリスチャンが去った「平野の町々」※に向く。そして「『基督教年鑑』や様々な地図を調べるなかで」※栃木、群馬、埼玉三県の「霊的荒廃」※が示されたという。ここにキリスト教未伝播の状況や近代主義 (Modernism) の影響などを読み取ったのであろうか²²⁾。1921 年 2 月には舟喜麟一が足尾小滝の伝道所に着任、同年 10 月太田琢治郎に代わって足尾教会の牧師となった。この舟喜らと翌年 9 月群馬県の大間々で天幕伝道 (Tent Mission) を行った。その年 7 月、当時鉱山伝道団の理事で後に C.J.P.M. の保証人 (REFEREE) となるチャールズ・インウッド (Charles Inwood) が足尾教会を訪問しており、天幕伝道の許可を与えたのであろう。後に彼女は「彼は祈りにおいて私と一緒に重荷を分かち合い、ビジョンの実現に関係した全ての問題を心配してくださった最初の一人です」と述べている²³⁾。大間々の天幕伝道でイザヤ書 49 章 11 節「我わがもろもろの山を路とし」という約束が与えられ三県伝道のビジョンが明確となった²⁴⁾。

(2) 群馬県東毛地域の開拓伝道と The Central Japan Pioneer Mission の設立

1923 年春バーネットは自らのビジョン実現の方法を見出すため、スエズ運河経由で帰英した。出発の時「G.V.M.M. は鉱夫、金属細工人を対象とする宣教団体であり、通常の資金 (regular funds) を他の目的に使うことができず」※、J.E.B. は「南西日本 (South-Western Japan) に存在する非常に貧しい地域に福音を伝えようとすることで手一杯にみえる」※という二つの難題を抱えていた。全ての協議の末、三県伝道を「G.V.M.M. 拡張の働き (the “Glynn Vivian Miners’ Mission Extension Work”)」※とする「暫定協定 (a modus vivendi)」※を G.V.M.M. との間で見出したとし、1924 年 3 月帰日した²⁵⁾。

帰日したバーネットは開拓伝道にふさわしい場所を探すために舟喜を派遣、「いくつかの町を回り太田で始めるべきであると確信させられ戻って」来た。彼女にとって太田は 2 年前 (1922 年) ある事情で東京から足尾への途上、東武鉄道を使った時「酒に酔った団体旅行客に「どこに行くのか」と尋ねたところ「私たちの目的地は太田です」」と言われて記憶に残った町であった²⁶⁾。「証」では「町の継続的存続のために主に二つのものに依存しています。大きな飛行機工場と呑龍様とよばれる有名な偶像」※と紹介している。1924 年初夏市村とともに太田に移り、大間々にいた舟喜も太田に移転、6 月北裏四丁目の空き地で 10 日間の天幕伝道を行った²⁷⁾。その後バーネットが住まいとした南裏三丁目の貸家の

一階を教会とし日曜礼拝などが定期的に行われ、12月には3名が受洗した²⁸⁾。太田の天幕伝道には新田郡尾島町から既に信仰を持っていた3名が来会しており、その年の夏尾島に講義所が開設された。一方館林でもJ.E.B.から来た佐野茂理治が開拓伝道を行い、10月の天幕伝道では60名の求道者が生まれた²⁹⁾。こうした急速な宣教の進展により、独立の宣教団体(a separate mission)の設立が必要と考えたバーネットは、翌1925年1月オーストラリアまでの切符を持ち出発、アメリカ、カナダを経由してイギリスへ向かった³⁰⁾。直接帰英しなかったのは帰途、新宣教団の設立に必要な活動を行うためであった³¹⁾。こうして同年5月レスターで、C.J.P.M.をG.V.M.M.から分離し、バーネットは最高責任者である管理者(Superintendent)に就いた³²⁾。そしてC.J.P.M.を「福音主義かつ非教派でG.V.M.M.の日本支部との協同の働き」と位置づけ、宣教圏を栃木、群馬、埼玉三県として足尾伝道も継続した³³⁾。「原則」には「はじめに」で示した内容に加え「内住の聖霊の力を信ずることによる全き救いを宣べ伝える」とした³⁴⁾。発足当初6名からなる諮問評議会(Advisory Council)が作られ、C.J.P.M.は一つの信仰宣教団体(a Faith Mission)となった。

バーネットの在外中1925年4月尾島で、7月には佐波郡境町で天幕伝道が行われた。尾島では近くの製糸工場から多数の工女が参加したが、彼女らは新潟から来た出稼ぎ労働者であり、その後の天幕伝道では山形県など東北地方の出身者も加わった。境町では子どもの集会に400名が参加し、準備した座席が足りなくなるほどであった³⁵⁾。彼女はこうした日本からの情報を得ながら、1925年秋から翌年春にかけてイングランド、スコットランド各地の祈りのサークル(Prayer Circles)を回り組織づくりに努めた³⁶⁾。この結果1926年7月の時点で「申し分のない数のサークルが作られており、リストは本部で表にまとめられたとした³⁷⁾。その後イギリスでの働きをキリスト者同盟(the Christian and Missionary Alliance)のイングランド代表者で、総括書記(General Secretary)に就いたレスターのE.M. エリソン(Miss E.M.Ellison.)に委ね、翌年5月15日イギリスを発ち、6月にはニューヨークで開かれたキリスト者同盟の年会(the Annual Council Of the Christian and Missionary Alliance)に参加した³⁸⁾。そして3ヶ月後9月には西海岸ロサンゼルスに達していた。この間アメリカの14の州で300人を超える「C.J.P.」の読者を獲得、九つの州でC.J.P.M.のための集会が持たれるようになったとした。ロサンゼルスからの手紙では、大陸横断の旅は「まるで組織することに長けた書記が旅を整えているかのように、時間やお金を浪費することなく西へ移動でき」とし「私は今大西洋から太平洋に届くC.J.P.M.への関心の細く長い鎖に最後の環をつなげ、完成しようと努めています」と結び、アメリカでの継続的な働きのため適切な書記の必要性を訴えた³⁹⁾。アメリカでの円滑な旅と支援獲得を解く鍵は、大陸横断にあたり、「ニューヨークのいくつかのセンターや他の場所で開かれる特に夏期協議会(Summer Conferences)でC.J.P.M.のために前進すべき門戸が開かれるであろうと信じます」としており、これが手がかりとなる⁴⁰⁾。

バーネットは1926年9月末に帰日し、年内に太田から館林の鍛冶町1603番地(現本町2丁目)に移り住んだ。館林は東武鉄道により東京へのアクセスも良好で栃木、群馬、埼玉に

容易に連絡できる三県伝道にとって絶好の地であった。翌 1927 年 3 月にはイギリスから終生の同労者となるドロシー・A・パー (Dorothy A. Parr) が来日しパーネットを助けた。C.J.P.M. の組織化と宣教は第一次大戦後の復興と国際協調の環境のなか順調に開始された。

(3) The Central Japan Pioneer Mission の管理者

1927 年 3 月 19 日から 21 日まで、新田郡薮塚温泉で C.J.P.M. 第 1 回の年会を開催した。これは「宗教を取り締まるための」「新しい議案が法律になったときに政府に承認するように」「協会」の設立も進められており、所属教会として最初の集会でもあった⁴¹⁾。この年会でパーネットはローマ人への手紙 15 章 15, 16, 20 節から「私たちは開拓宣教団体の一員として祭司の職に召されました」との題で語っている⁴²⁾。「協会」の規則で C.J.P.M. 管理者パーネットの立場を「各教会は全くの自給独立に至るまで、セントラル・ジャパン・パイオニア・ミッションの財政上の援助を受くる間は、同ミッションの管理者の指導を受くるものとす」と限定、「協会」の運営は舟喜麟一ら日本人伝道者 (Evangelist) に委ね、彼女は開拓伝道を指導、管理した⁴³⁾。「協会」の設立は時機を得たものであり、これに同年 11 月 1 日には前橋百軒町に教会を兼ねた日本人伝道者の養成機関、聖書学寮 (the Bible school) の開校が加わった⁴⁴⁾。既に 1927 年 7 月号「C.J.P.」では前橋を群馬県の政治の中心地であるが「明確な福音的教会がない」と紹介し、開拓伝道のため財政支援を海外に呼びかけていた⁴⁵⁾。ここでは舟喜が中心となり伝道者養成の訓練 (Training) を行い、追ってパーネットらも教師として参加する。開校 6 年後、1933 年に入学した吉村房次郎は「記憶に残る学課は何といっても、パーネット先生の毎日、8 ヶ月にわたるローマ人への手紙の講義だ。前日の復習と質問から始まるのが常で、「質問があることは、わかり始めた証拠で、ないことは何もわかってないことです」と詰寄られ」と回想している⁴⁶⁾。印象に残った講義にローマ人への手紙をあげる人は多い。彼女はこれを「基督教々理の基礎的真理を組織的に論述したものである事は論を俟たない」と考えていた⁴⁷⁾。1935 年 10 月に入学した市川惣蔵は、「畢生の力を傾けられたのは、何といってもロマ書の講義でありましょう。特に強調されたのは称義と聖潔でありました」と記している⁴⁸⁾。パーネットは個人伝道でこの称義 (義認)、聖潔 (聖化) の前提となる罪の悔い改めを強く求めた。後に伝道者となる小澤貞子 (旧姓橋本) は、1924 年の太田の天幕伝道に参加、その後設けられた教会を訪れた。「集会が終わると直ぐ私の側へ近づいてお声をかけて下さったのが、パーネット先生でございました。そしてあなたに罪がある筈ですから、一つ一つ名前をつけて神様にお詫びする様にと云われ、いろいろ親切に導」かれたという⁴⁹⁾。

また、パーネットは宣教地にあたり日本の宗教や文化に強い関心を示した。1928 年晩夏オーストラリアに向け出発する前、居住地館林から訪れた前橋百軒町では尾引稲荷の祭りが行われていた。「私の人力車は単調なリズムの太鼓で一杯の手押し車によって導かれた行列を横切らなければなりません」と繰り出した山車を紹介しながら「この祭りは日本のこの地域の最も大きな、知性に関しては最も教化された町において、疑いもなく数

千年の間続けられていますが、今までに認められてないようなこの国における驚くべき必要を物語っています」と報告し、神社の祭り日本人の生活関わりの深さを紹介した⁵⁰⁾。聖書学寮でも「日本においては御真影に対する問題があります。もし日本において御真影に対して礼拝の考えがないならば、問題はありませんが、どうでしょうか」と問いかけている⁵¹⁾。宣教を進める上で御真影、神社神道を手強い相手と捉えていた⁵²⁾。

1927年6月にはパーや佐野茂理治らと埼玉県羽生の開拓伝道を行い、来日時に記憶された埼玉県の伝道が開始された。その結果1928年6月には男性5名が受洗した。利根川で行われた洗礼式の喜びを、稲の苗間と桑畑の「四方八方に芽を出している新しい命が、この小さな人々の群れの心に起こった新しい生命への霊的復活にふさわしい象徴のように思えました」と伝えた⁵³⁾。このようにバーネットは日本の宣教現場(Field)の状況を原則年4回発行の「C.J.P.」で本拠地(Home)である海外の支援者に報告している。

管理者としてバーネットの最大の仕事は、何とんでも、日本宣教のため海外のクリスチャンの祈りとともに財政上の支援を仰ぐことであった。そのために1923年の最初の帰英を含め、計6回海外を旅して協力を訴えた。1928年9月行われた3度目の旅、代表者の旅(Deputation tour)では出発に当たり、まずC.J.P.M.結成2年半を回顧、聖書学寮の開校、前橋、羽生、伊勢崎などの開拓伝道を支援者に感謝した後「1927年12月までの間に私たちが大いに頼ってきた資金の全てが終わりをむかえ、ひたすら神に頼むこととなります」と述べた⁵⁴⁾。「おそらくこの秋、再び代表者の働き(deputation work)に着手することが必要となる」と予告し⁵⁵⁾、神戸港から船出、香港経由でオーストラリアに向かった。その結果クイーンズランド(Queensland)、ニューサウスウェールズ(New South Wales)、ビクトリア(Victoria)、タスマニア(Tasmania)の各州に会計係(Treasurer)と地域のまとめ役である書記(Secretary)が選ばれた。初めて訪れたニュージーランドでは会計係が選ばれ、国土を構成する二島の17ヶ所(17名)に現地書記(Local Secretary)が置かれるなどの成果があった⁵⁶⁾。その後渡ったカナダでは1929年夏の3ヶ月過ごし、カナダ独自の諮問評議会が作られ、260の「C.J.P.」の新たな読者を獲得した⁵⁷⁾。帰英したバーネットは半年余りの滞在の後アメリカ東部、カナダで活動し帰日した。そして1930年秋には館林から聖書学寮のある前橋に移り住み、3年ぶりに前橋教会のクリスマスに参加した。そこに満席となった会堂に既定の宣教圏三県だけでなく長野、新潟、山梨各県出身者を見出した。これを「工女への働きの影響力が如何に広げられたかを示しています」と報告した⁵⁸⁾。製糸工女の多くは不況に苦しむ東北、北陸地方からの出稼者であった。こうして受洗者は太田開拓以来およそ3年半で92人、8年半後の1933年末で420人となった⁵⁹⁾。

(4) 宣教圏の拡大と困難

1931年6月に始まった高崎の開拓伝道にはバーネットも参加して行われた。同年9月1日の上越線全線開通を控えた高崎は、隣接県への連絡駅を持つ町として発展が期待され、特に製糸工女伝道などを通じて関わりができた新潟県への伝道も視野に入ることとなる。

この年は上越沿線の群馬県沼田でも伝道が開始され、宣教はさらなる拡大の段階に入ろうとしていた。ところが9月18日満州事変が勃発、兵営のある高崎では満蒙の既得権益確保などを目的とする民間団体、国民国防同盟会が発足、11月3日の発会式は「遠くは利根、吾妻、邑楽、方面より集まる老若男女の數合せて一萬二千有余、本市有史以来と稱せらる」ほど盛大に行われた⁶⁰⁾。翌年2月、高崎歩兵第十五連隊は満州事変に続く、第一次上海事変支援のため大陸へ向かった。高崎伝道はこうした国防気運のなか進められた。この機運を「協会」も受け入れ、支えるようになる⁶¹⁾。この頃パーネットは聖書学寮でモーセ十誡の講義を行っていたが、六条「汝殺す勿れ」を次のように講解したとされる。戦時に言及し「個人としては殺人である戦争に参加は出来ないが、国家の命令として戦争に参加できると信じている人々もいます。第一次世界大戦で戦争に参加した信者の人達は、直接戦争に加わらない輸送兵、伝書鳩係、看護兵等を志願して働きました」と、聴衆の多くが若者であろう聖書学寮での発言である⁶²⁾。また1933年2月号「C.J.P.」では「現在、満州は以前より一層日本の影響が強まっています。それは日本が1億2千万の人々の運命を支配していると言って差し支えありません」とし、日本の支配拡大に合わせるかのように新潟、富山、石川、山形四県への宣教拡大のビジョンを紹介した⁶³⁾。一方1929年に起こった世界大恐慌の波がC.J.P.M.の財政を圧迫しはじめていた⁶⁴⁾。このため1934年7月からアメリカ、カナダ、イギリスへ出かけた。出発にあたり「この8年間において、「C.J.P.」の4,500人の読者の半分以上が連合王国(United Kingdom)の以外の地域に居り、同時にまたミッションへのサポートの約半分がオーストラリア、ニュージーランド、アメリカ合衆国、そしてカナダから来ています」と支援を感謝しつつ、「1934年において将来を見ると、私たちは一つのミッションとして多くの蓄えを持っているのかと考えます。純粹に人間的な立場から、人は遠くにあるぼんやりとしているものを恐れます。それは最近のたくさんのミッションの経費削減(Retrenchment)の経験です」と加えた⁶⁵⁾。この時総括書記がいるロンドン以外では「世界のいかなる場所においても、C.J.P.M.のための集会は持たれていない」かった⁶⁶⁾。パーネット留守中日本に残る「Miss パーと Miss トマス、この2人には非常に多くの祈りが必要です。それは高崎の大きな重荷に加えて、私が留守の間組織を運営することになるから」と伝えている⁶⁷⁾。

この4度目の旅ではアメリカの西海岸から東部、南部に至る広範囲な地域を旅した。訪問した都市は15を超え、これによってアメリカでC.J.P.M.の組織化が進んだ⁶⁸⁾。またカナダではエドモントン(Edmonton)とカルガリー(Calgary)で現地書記が置かれ、帰英後はイングランド、スコットランドの広範囲な地域を巡回した。しかし、パーネット在英中の1936年1月15日、日本はロンドンの海軍軍縮会議の本会議から脱退、同月23日付ロンドン近郊イーリング(Ealing)からの手紙で「日本では1936年は「危機の年」と呼ばれているでしょう。というのは国際連盟からの完全な断絶の年になっているからです。これはC.J.P.M.の私たちにとって、もし神が共におられるならば、想像さえしない拡大の年であることが立証されるかも知れません」と宣教支援拡大を期待しつつも国際社会から孤立化する日本

に懸念を示した⁶⁹⁾。この時バーネットは 50 代半ば過ぎており、2 年近い旅は過酷であったに違いない。旅の最中の 1935 年春、新潟県三条、小千谷などの開拓が行われ、11 月号「C.J.P.」から新潟、富山、石川、山形四県が C.J.P.M. の宣教圏に組み入れられた。1936 年 4 月に帰日した彼女は 7 月に行われた新潟県三条の天幕伝道に参加し、信者が生まれていた小千谷、燕などの町を訪問した⁷⁰⁾。宣教困難を想起させる記事が「協会」の機関誌に見られるようになるのもこの頃からである⁷¹⁾。

3 戦争と宣教

(1) 反英と反日の間

4 度目の旅を終えた翌 1937 年春、C.J.P.M. は新たな開拓伝道地として長野県依田川流域、丸子町とその周辺の伝道を開始、前橋百軒町では聖書学寮を増築して宣教拡大に備えた⁷²⁾。初秋にはバーネットも当地を訪れている。遡って 7 月、北平(北京)郊外盧溝橋で起こった日中両軍の衝突は、瞬く間に華北から華中に拡大、日中間の全面戦争となった。動員により信者の出征が相次ぎ、9 月号の「協会」の機関誌では「我が帝國に託せられたる正義の使命を全うし、東亞の平和を維持し、世界の福祉の基礎となる様に祈るべき」「徒に興奮に酔ひ、心の落付きを失うてはならない」と訴えた⁷³⁾。翌 1938 年 2 月号「C.J.P.」で漸く「神の平和が前線にいる全てのクリスチャンの心に駐屯してくださいように、銃後では遺族(bereaved)や不安を抱える(anxious)家族が支えられ、慰められますように」、5 月号に「戦争を通じて苦しんでいる全ての人のために、中国と日本の主にある子どもたち全てのために」との「祈りの要請」が掲げられる。この頃出征した信者からも犠牲者が始まっていた⁷⁴⁾。

中国大陆での戦争は、ここに権益を持つイギリスとの軋轢を引き起こし、関係国民の感情を刺激した。宣教師パーは盧溝橋事件直前の 6 月下旬、C.J.P.M. の代表としてオーストラリアに向け神戸港を出発し、アメリカ大陸、イギリスを巡回、帰日後の 1939 年 7 月号「協会」機関誌では「日本に於ける救霊の重荷を傳へ」るため「支那事變の眞中、支那のデマに迷はされた人々、それに無理解を加え相當激しい悪条件のもとに」旅したと記している⁷⁵⁾。パーは「デマ」による海外の反日的情報を持ち帰った。1939 年 7 月、8 月日本軍の天津英租界封鎖とその後の措置をめぐり、日本各地に反英運動が起こり、バーネットが住む前橋でも行われた⁷⁶⁾。9 月、ヨーロッパではドイツ軍のポーランド侵攻により英仏は対独宣戦布告、同年 11、12 月号「C.J.P.」では「昨年あるいはもっと前から、もう一つの世界戦争が世界中の全ての国を暗い雲のように覆ってきています。進行中である私たち自身の戦争に伴って、ここ日本においては、このような衝突の中で日本がイングランドに敵対するように提携させられて行くのではないかと、今特に私たちは恐れています。このことは私たちがこの国を去ることを必要としているかも知れません」と述べた⁷⁷⁾。この年多く伝道者や聖書学寮生が病気などの理由で退き、増築した聖書学寮へ入学に適する若者は軍隊におり、世界大恐慌下でさえ維持した C.J.P.M. の財政は落ち込んだ⁷⁸⁾。「ブリテン島にい

る友は、ここでの過ぎ去った2年半の戦争における私たちの困難をよく理解してくださるでしょう」と日中間の戦争が始まって以来の思いをバーネットは伝えた⁷⁹⁾。折しも10月のある日曜日、出席した前橋教会の集会で監視の目を向ける憲兵の存在に気づいた。「彼らは日本の他のところで宣教師と相当な騒ぎを起こした集団」と伝えた⁸⁰⁾。こうしたなかでも「本年最初の降雪にて足をうばわれ困難なりしも」11月26日から三日間、新潟県長岡の開拓伝道応援のために出かけた⁸¹⁾。

この頃バーネットは戦争をどうみていたか。1939年11月号の「協会」機関誌に細ヶ沢の「前橋伝道館」で「勿論私共の言う戦は義と不義との戦」であるとの前置きに「地上に人の力で戦争が止むと思ひません。不義のある處にそれを正さねばならい正義の戦もあり、それは止むを得ないことです」と語ったという⁸²⁾。日時の記載はないが、おそらく中国大陸で戦争を進める日本人を意識したのであろう。翌年ヨーロッパでのドイツ軍進撃のニュースを聞き、1940年8月号「C.J.P.」で海外からの支援継続を訴えながら「もしも、私たちがまた煙を出している管と鉄の破片の中に信頼を置く異教徒の心のレベルに下るならば、ある日昨日の全ての繁栄はニネベ(Nineveh)とツロ(Tyre)の一つであると分かるでしょう」としている⁸³⁾。「正義の戦」に勝利するためには「異教徒の心」である「煙を出している管と鉄の破片に信頼を置くこと」も必要であり、この二つの論理は矛盾を孕む。

(2) 日本残留と「聖書のことば」

バーネットは62歳となる1940年6月22日横浜から船出しアメリカ、カナダへ出かけた。旅の目的は、前年落ち込んだ財政支援と宣教師派遣の要請であった。出発に際し「「弱い私も唯願ふは、私のために御祈りを願ふ」と言い残し」、1917年来日時に太平洋を渡ったエンプレス・オブ・ロシア号(Empress of Russia)に乗船した⁸⁴⁾。すでに1938年11月、第一次近衛内閣は中国大陸での戦争目的を東亜新秩序建設とする声明を発表、以来日英に加え日米関係も悪化していた。この頃宗教界は1939年4月に公布された宗教団体法の施行に向けて動いていた。この法律は宗教団体に法人格を与える一方、政府の監督、統制下に置こうとするものであり、「協会」も法人格を得べく準備を進めた⁸⁵⁾。ところが1940年4月1日施行の二ヶ月後6月12日、文部省は教団の認可基準を教会数50、信徒数5,000と通達したことで情勢は一変した⁸⁶⁾。バーネット離日はこの10日後である。以後小教派の多いプロテスタント教会は、認可基準を満たすべく信仰面などで近接する教派間の合同が始まった。合同に拍車をかけたのが、同年7月のロンドンに本部を持つ救世軍の外謀容疑事件である。これをきっかけに宣教師の国外退去が始まり、外国の宣教団体との財政上関係が清算され自給体制となり、これが教派間の合同を促した⁸⁷⁾。さらに「教派を全て一つの日本の教会として形成するという動き」となり、1941年6月24日の合同教会、日本基督教団創立総会に至った⁸⁸⁾。この動きに対し「協会」は1941年4月から自給体制に移ったものの合同の動きに加わらず、非法人単一の宗教結社として独自の道を選択しようとした⁸⁹⁾。8月帰日予定としたにも関わらず、日本基督教団の創立総会が迫る6月19日バーネッ

トは横浜港に到着した⁹⁰⁾。そして8月号の「C.J.P.」で留守中の1年間の状況を分析し日本残留の意志を示す。まず同年4月末現在、日本に残っているプロテスタントの宣教師は200人以下であるとし、その中に「Miss パーと Miss トマスと私自身がいます。私たちは外交団(the Diplomatic Corps)がするのと同じくらい長く留まることを望んでいます。それは無期限であることを意味します」とする⁹¹⁾。この決断は「日本に対する真の召命がある宣教師に留まることを依頼するという」決議が日本人の伝道者により通過したからだという⁹²⁾。決議の詳細は不明だが、「協会」の宗教結社の規則に「外国人宣教師ハ日本人教師ノ規則ヲ準用シ理事会ニ於テ詮衡ノ上本教団ノ教師タルコトヲ得」と記されており、これを裏付けている⁹³⁾。彼女ら宣教師に活動の余地があると見たのだろう。さらに「日本における神の教会の働きに全生涯を献げるといふ真実な召命を伴った」宣教師志願者に「代価はガラテヤ人への手紙2章20節の意味するところにおいて真実な実験済の知識です」と呼びかけた⁹⁴⁾。しかし7月25日アメリカは在米日本資産を凍結、これに英蘭も追随、日本は応酬した。海外からの送金は途絶し、以後の生活さえも危ぶまれた⁹⁵⁾。

宣教師パーが第二次世界大戦後記した「THROUGH THE WAR YEARS IN JAPAN」(以下「戦時下の日本で」)によれば、1941年の夏が終わる頃バーネットは詩篇37篇3節「エホバによりたのみて善をおこなへ、この国にとどまり真実をもて糧とせよ」との「聖書のことば」が与えられているとパーに伝えたという⁹⁶⁾。これは横浜のイギリス総領事館が派遣する安徽号(アンフイ号)を使って退去するように勧告した9月1日と時期的に一致する。勧告内容は「いわば引き揚げ船としての便船の最後」を伺わせるものであった⁹⁷⁾。バーネットらはこれに応じなかった。さらに「C.J.P.」11月号に掲げた「fear」との記事では、人にあるいくつかの恐れを挙げ、その一つ「未知の将来の恐れ」は「聖書ではこれらの種類のものを「不安な気苦労」と呼んでいます。また、マタイによる福音書6章24～34節のように信者には明確に禁止されたもの(必要ないもの)であるだけでなく完全な救出の方法がここから導き出されます」と「聖書のことば」を重ねた⁹⁸⁾。しかし宣教師トマスは11月21日前橋を出発し、オーストラリアへ逃れた⁹⁹⁾。同月24日に「協会」は解散、同日認可の日本基督教団へ加入した¹⁰⁰⁾。この日バーネットは63歳の誕生日を迎えた。先に日本基督教団創立時に加わらなかった「このことが政府との関係において将来私たちにどのような影響を及ぼすか今は分かりません」とした事態が現実化する恐れがあったのか。「多くは近代主義者であり、福音を知らない」と批判していたプロテスタントの合同教会への参加に彼女はどのように関わったであろう¹⁰¹⁾。自給体制となった「協会」に対し彼女の権限はなく、「協会」が宗教結社として認められたとしても「銓衡」を受けた一教師に過ぎなかった。

(3) 日英戦時下の群馬で

1941年12月8日日本軍のマレー半島に上陸により日英は開戦し、ハワイ真珠湾攻撃でアメリカとの戦争も始まった。この日をバーネットとパーは前橋百軒町の宣教師館で迎えた。「戦時下の日本で」に記すところでは、翌日特高警察が来て家宅搜索の上、地図や写

真乾板を押収した。しかし日本人関係者の名簿は前日焼き捨てており、警察の手に渡ることとはなかったという。その後二人は警察に連行され取り調べが行なわれ、この時宣教師館を桐生のカトリックのフランス系カナダ人神父2名と、草津にいる英国人ネトルトン(Miss Netteton)の計5人の抑留所として使うことが申し渡された¹⁰²⁾。以後外諜容疑者としての抑留生活が始まった。警察の監視官が宣教師館の玄関脇の小部屋にいて彼女たちを見張っていたと「戦時下の日本で」で述べている。翌年3月20日には外諜容疑者のまま抑留解除となり、以後制限つきながらも外出が許されるようになった¹⁰³⁾。しかし噂には聞いていた日英交換船龍田丸は1942年7月30日横浜を出航、これには在日大使クレギーも乗船していた¹⁰⁴⁾。結果的に一回限りとなった交換船でバーネットらは帰英できず、「二度目の交換船で帰れることを期待し」(「戦時下の日本で」)ながら終戦まで日本に留まることとなった。なお抑留開始以来日本政府が負担した生活費は、1942年7月から「スイス公使館を通じてイギリス政府から」来ることとなり、イギリス政府に C.J.P.M. が全額返済することとなった。食料の配給量は終戦まで日本人と同じであった¹⁰⁵⁾。「戦時下の日本で」では抑留解除後およそ1年間は日本人の教会の日曜礼拝や特別な集会には出席できたが、1943年春からは「町への外出は賢明でないと丁寧に忠告され」、以降「舟喜夫妻、幾人かの通常の訪問者、しばしばある不意の訪問者、頻繁に通ってくる特高以外周囲の如何なる人と接触を持たないことになって」いた。ただし2,3日休暇を得た幾人かは聖書の学びのために訪れ、特に「兵役のため召集を受けた働き人や信者は如何なる時もお別れのために立ち寄り」ったという。知り合いの未信者から野菜など届け物もあったとしている。

1945年7月には日本各地の都市が空襲を受けるなか、「警察からの命令で」「ネトルトンさんの家に同居」するためバーネットとパーは草津へ移動した¹⁰⁶⁾。ここは「聖バルナバ・ミッション関係の唯一現存する」聖マーガレット館であった¹⁰⁷⁾。草津の生活は前橋以上に厳しく、「食料がないので先生方も栄養失調の兆候が出て来て、特にバーネット先生の御体には影響が強かった」と、当時手伝いをしていた友野ふじの(旧姓今井)は述べている¹⁰⁸⁾。「戦時下の日本で」には、8月5日の夜、空襲を受け赤く染まった前橋方面の空を見て10日後の日本敗戦を迎えたと記している。戦争終結の知らせは「まさに信じられないほどの喜び」で詩篇126篇1節「主がシオンの繁栄を回復されたとき、われらは夢みる者のようであった」とした¹⁰⁹⁾。困難な草津の生活であったが、彼女らが「前橋から連れてきた鶏が生む卵を分けてくれ、学習の面倒も見てくれた」と同居した方の証言がある¹¹⁰⁾。

日英戦時下でのバーネットの思いを直接知り得る記録は、ほとんど見出せない。ただ戦時下執筆の「自伝」でロクム・テメンス夫妻との出会いで感じた「私がもしクリスチャンであろうとするなら、キリストのためにいかなる所に遣わされても、どんなことでも耐えることを厭うべきでないと気づいた」*、あるいは宣教地として日本を選んだ理由に「その頃 J.E.B. を通してしっかりとつながっていた日本が残った」*などは戦時下の思いともいえよう。また「日本における将来の宣教師の働きに対する予測はインクのように暗く見えますが、私の日本への召命の立場、現在もその立場にいますが、この国での奉仕のもう一

つの時代が私たち C.J.P.M.の撤退を越えて横たわっているとまだ信じ」*ていた。

4 宣教復興の道筋

(1) 日本の敗戦と帰英

1945 年 10 月頃、バーネットらは草津から焼け残った百軒町の宣教師館に戻った。この時、連合軍は前橋に進駐していた¹¹¹⁾。この頃の思いを海外の支援者に次のよう伝える。まず戦時中は「福音伝道のための広い門が開かれるような解決をお与え下さい」と常に祈っていたこと、それは「期待していたよりずっと早く」聞かれたと神に感謝しつつ「連合軍による日本本土侵攻となれば、遂には日本国民は全滅の憂き目に会うという恐れ」があったこと、また東京の空襲被害や広島の新爆投下を「世界のどこにも女性、子供、老人などこれほど大量虐殺されたという大事件はない」と伝え、戦後の日本宣教にあたっては「非キリスト教国の人々に共通の福音を拒む態度とか、空襲の被害や敗戦の悲哀からくる恨みつらみの感情にどう対処していくかの課題があるだけ」とし日本人のために衣類や食料の支援を求めた¹¹²⁾。11 月一時帰国するようにとの大使館の命令で、バーネットとパーはアメリカ軍の軍用列車で横浜に向け出発した¹¹³⁾。バーネットは横浜からの船中で流感に苦しんだものの、シアトルに到着した後はワシントン州などで集会を持ち、船の都合で遅れて横浜を離れたパーとロサンゼルスで合流した。その後二人は別行動をとり、各地で集会を持ちながらアメリカ大陸を横断、ニューヨークで合流し船出した二人は、翌年 2 月 12 日イングランド南部の港町サザンプトン(Southampton)到着した¹¹⁴⁾。バーネットは帰英途上で 67 歳の誕生日を迎え、1935 年春以来およそ 11 年ぶりに英国の地を踏んだ。

帰英して 10 ヶ月後の 1946 年 12 月 7 日、バーネットはヒースロー空港からシカゴへ向かい 9 日に到着した¹¹⁵⁾。この頃海外で得た情報に基づき書いたであろう 1947 年 2 月号戦後最初の「C.J.P.」で日本の状況を分析し「日本がイングランドやアメリカのようなクリスチャンの国になるか、あるいは共産主義的無神論の暗い夜を過ごすか」の岐路に立っており、「日本の福音化はちょうど危機のような立場」にあるとする。その理由は敗戦により国家神道が廃止され、旧来の価値観の動揺もあり宗教的な間隙が生まれているからで、連合軍の民主化政策のもと「もしも私たちが最後まで日本の福音化を成功させれば、本当に日本のクリスチャンの力強い群れの影響力を通して、その理想が真に日本人の社会の心にしみこんでいければ、マッカーサー元帥の社会的実験は成功できます」と海外、日本のクリスチャンに期待をかけた¹¹⁶⁾。そして先の大戦を次のように意味付けする。「私たちは戦争の盛衰の流れを見た時に、この戦争が国家間だけの通常の戦争であるのみならず、その背後に日本だけでなく極東全体の人々の魂を支配するために唯一の真の神の力と戦っている巨大な異教の仕組みの力を感じざるを得ませんでした。勝利を得るためにとられた方法のいくつかを深く悔い改めなくてはなりません、そのすべての背後での働きに神の支配する御手を見出さずにはいられません」と連合軍の勝利で、条件付ながら「異教徒の心」であるはずの武力が「神の支配する御手」、「正義の戦」の手段となる¹¹⁷⁾。この見解は

「C.J.P.」に掲げられただけに、以後の宣教の重要な視点となろう。2月、パーネットはアメリカで離日以来、初めて舟喜から手紙二通を受け取った。それは「昨年10月日本人によって外国へ送られる直接の通信の禁止が占領軍により明確に取り去られた」からで、この手紙から福音伝道協会が日本基督教団から離脱し再建がなされつつあること、日本の「人々の心へ神の真実な働きが従来よりも容易になっている」ことを知った¹¹⁸⁾。これに励まされたであろう彼女は、アメリカ大陸でも C.J.P.M.の再建に努め、カナダのトロントなどオンタリオ州の町々を訪れた後シカゴに戻って、ジョージア州アトランタなど南部、ワシントンなど東海岸の諸都市を回った。なかでもテネシー州チャタヌーガ(Chattanooga)は12年前4度目の旅で訪れおり、以来多くの人たちが彼女らの働きを覚えて祈っていたことを知った¹¹⁹⁾。そしてカナダを巡回したパーとサンフランシスコから船出し日本へ向かった。

(2) 帰日から召天

1947年6月13日横浜に到着したパーネットらは、その夜多数の信者が出迎える前橋駅に降り立った。そして6月21日からは焼け残った前橋の聖書学寮で行われた年会(Annual Meetings)に出席し、この年会で「16の教会から信徒の方達が約200人位集まり」再建しつつある「協会」の姿を見た。パーネットはこの年会の「一つを除く全ての講演を用意しなければならない」ほど用いられた¹²⁰⁾。そして初秋と思われる頃、パーとともに東毛地方の太田、尾島、館林の諸教会を訪れた。これらの教会では戦時下も教会が保たれ、クリスチャンホームもできていた。特に C.J.P.M.生誕の地太田と尾島は久しぶりの訪問であった。この地域は中島飛行機の工場があったため「協会」は「イギリスの宣教団体と関係を持っていると知られていたので」1937年頃から彼女らは行かないようにしていたという¹²¹⁾。その他訪れたどの教会も人があふれており、その活況は希望を抱かせた。一方日本国内の「暗いどうしようもない外見は、通りや公の場でみる人々の顔からは消えています。どこでも仮設の建物が東京や横浜、前橋そして他の町で広漠とした焼けた場所を覆っているので、うわべの観察者はものごとが元の状態に戻ったと考えるかも知れません。しかし実際問題として国全体で焼けて再建された住居の割合は1/4のみ、即ち破壊されたおよそ200万戸強の内50万戸にすぎません」と日本の現状にも目を向ける¹²²⁾。続いて「古くからの信徒の様子を読者の方はお知りになりたいでしょう」と前置きして、宣教師館にごく近く海外の支援者にもなじみ深い、前橋教会の古くからの信者たちの様子を紹介する。そこに戦時下パーネットらを支えた人、戦時下信仰深く歩んだ人、戦前家族の反対で教会を離れたが戻った人、戦地に征き無事復員して伝道のために働く若者、そして戦場で子どもを「殺され」空襲で焼け出された人、子ども、夫が戦死したが伝道のためよい働きをしている人がいた¹²³⁾。彼女の目は彼らの「信仰」に注がれる一方で戦争の深い傷も知らせている。幼い頃ノーフォークの田舎の教会に階級社会の現実を理解したパーネットなら、この傷の癒しがたさも知っていたはずである¹²⁴⁾。これは満州事変以来の戦争の経過で生まれたものの、彼女も日本人と共にこの歩みに関わってきた。当時おそらく日本のどこの社会にもあ

った状況ではあろう。だがここに「神の支配する御手」を見出しただろうか。

帰日2年を過ぎた1949年の冬頃からバーネットの身体に衰えがみられるようになった。しかし、約束した集会には出かけ、聖書学寮の講義も行っていた。こうしたなか1950年5月、舟喜麟一の辞任を受け「協会」の理事長に就任した。日本の伝道の成功の秘密は「其は自分が、外国人が、表面に立たぬ」こと常々言っていたにも関わらず、彼女はここで「表面に立」つこととなった¹²⁵⁾。日英戦時下に続く試練となる。翌年春には何事にも介護が必要となり、やがて寝込むようになった。7月2日朝、死が近いことを感じた付き添いの渡邊三千代が「パー先生に来て頂きましょうか」と尋ねると「「サンキュー、イエス、プリーズ」これがバーネット先生が地上で発せられた最後の言葉の様」だったという¹²⁶⁾。この日の正午静かに息を引き取った。葬儀は翌々日4日、舟喜麟一の司式のもと百軒町の前橋教会で執行され、遺骸は同日前橋市の郊外の駒寄村(現在吉岡村)大久保の墓地に埋葬された。「地上の生涯72才、日本の伝道の為に34年の間つくされた。生前の願いの通り4日、日本の土に埋葬された」と「協会」の機関誌は告げた¹²⁷⁾。

まとめ

バーネットは日本人によく仕えた。「何もわからぬ小さな子どもたちにも、又教育の高い地位にある人にも、少しもわけへだてをしないで、キリストの心をもつて心としておられました。お茶を一杯下さるにも心をこめてくださいました」と語る足尾以来身近に接した舟喜麟一の夫人ふみの言葉からも分かる¹²⁸⁾。草津の子どもたちとの交流に通じる姿である。義認と聖化の恵みから出るこの姿勢が、戦時下抑留と以後の軟禁生活の厳しさに耐えさせ、日本宣教再開の希望を支えた。

バーネットがもたらした福音主義キリスト教は、彼女自身、C.J.P.M.の宣教師、日本人伝道者を通じて伝えられた。この伝道で信仰を持った者の多くは足尾の鉱夫、製糸工女たちのような急激な資本主義化の中で過酷な生活を強いられた労働者、無業や病床にある多くの困難を抱える人たちであった。彼らはこの福音によって自ら苦難を受け止め、生きる希望を見出した¹²⁹⁾。そしてこの宣教ためにバーネットは単身海外の友を訪ね支援を求めた。だが、中国大陆での軍事行動を伴う日本の国家的膨張の動きは、故国イギリスとの対立を生み、やがてアメリカをも敵国とする戦争に行き着いた。そして彼女の宣教師としての活動は止んだ。バーネットは満州事変後の国防機運隆盛のなか、第一次大戦の体験をふまえ、これを例示して備えさせた。その記憶があるなら「正義の使命」との言葉で遣わされ、戦場で死した者たちの思いをも包み込む「聖書のことば」を見出そうとしたはずである。戦後宣教の起点とも言うべきそれは、どのような「聖書のことば」だったろうか。ともあれバーネットが伝えた信仰は戦後、福音伝道教団などに受け継がれ、栃木、群馬、埼玉など北関東中心に教会を形成した¹³⁰⁾。

注

(1) The Central Japan Pioneer Mission とその宣教から生まれた福音伝道協会の位置づけについては中村敏著『日本における福音派の歴史—もう一つの日本キリスト教史』(いのちのことば社 2000 年 110~114 頁)を参照。また福音伝道協会の後身、福音伝道教団も加盟し、1968 年に結成された福音派の団体日本福音同盟(J.E.A.)の創立宣言に「聖書をことごとく神の言と信じ、これを信仰と生活のうごかすべからざる基準」(日本福音同盟発行『日本の福音派—日本福音同盟 15 周年記念』いのちのことば社 1984 年 153 頁)とあり、福音伝道教団「教憲」第一条では「旧新約聖書六十六巻は、神の靈感によるもので誤りのない神のことば」(宗教法人「福音伝道教団」教憲 第一条 1981 年)としている。

(2) ここで「中央日本」とは、The Central Japan Pioneer Mission の日本名「中央日本開拓伝道団」に由来する。当初栃木、群馬、埼玉の三県を指すが、宣教の進展に伴い三県周辺の地域も含むようになる。尤も第二次世界大戦後、宣教圏が「本州北部及び主が示す他の地域」となり、「中央日本」のイメージとは違ったものとなる。

(3) 福音伝道協会の後身、現在の福音伝道教団は関東地方に 55 教会と伝道所、1310 名の会員を有する(『キリスト教年鑑』キリスト新聞社 2016 年)。

(4) 「Principles」 「C.J.P.」 Vol. I . No.1 OCTOBER, 1925.

(5) 「福音伝道協会規則」1927 年 3 月 18 日発行 第三条「教義」第一項「聖書」

(6) 前掲注(4) 「Principles」

「聖書の逐語靈感」と合わせて根本主義(Fundamentalism)の主張と重なる。根本主義は自由主義神学への対抗として、20 世紀初頭アメリカで生まれ、その系譜はイギリスまで遡源可能とする(東京神学大学神学会編『キリスト教組織神学事典』教文館 1972 年 149~150, 152 頁)。用語としての根本主義の出現は 1909 年に遡るとされるが、イギリスのキリスト教界で採用されていない呼称である(J.I.パッカー著、岡田稔訳『福音的キリスト教と聖書』いのちのことば社 1963 年 35~39 頁)。英国生まれの C.J.P.M.の「原則」でこれを「福音主義(EVANGELICAL)」としているのはそうした事情によるのであろうか。パーネットも自身を根本主義者であるとする強い主張はみられない。なおパーネットが批判する近代主義は自由主義神学を基盤とし聖書の歴史批評的研究を取り入れ、イエスの神性などの伝統的教理を再解釈した。日本では 19 世紀末に新神学として紹介された。

(7) 「自伝」執筆時の立場を「手続き上捕虜(technically a prisoner of war)」としている。

(8) パーネット誕生の次第は「福音伝道教団史年表」『教団史年表・写真集 福音宣教六十年の歩み』所収 宗教法人福音伝道教団 1989 年 122 頁による。

(9) J.H.R.ムアマン著 八代崇 中村茂 佐藤哲典訳『イギリス教会史』聖公会出版 1991 年 530~531 頁

「訳者あとがき」で「本書は現時点でも、欧米のほとんどの大学神学部や神学校の標準的教科書とされており」(611 頁)としている。

(10) 「自伝」では、宣教師夫人はペンテコステ連盟(The Pentecostal League)のリーダー・

ハリス夫人とつながりを持っていたとしている。

(11) 国会図書館のホームページ, リサーチ・ナビ(「Explore the British Library」
http://explore.bl.uk/primo_library/libweb/action/search.do?dscent=1&fromLogin=true&dstmp=1453947303323&vid=BLVU1&fromLogin=true)から検索した結果、『Spirit Pictures』は Mary G. HARRIS, Mrs. 著『Spirit Pictures of the Pentecostal Blessing.』ではないか。

(12) 信仰宣教団体は教派に頼らず個人的な自由献金により支えられた。ジェームズ・ハドソン・テラー (James Hudson Taylor) 設立の中国内地伝道団 (C.I.M.) はその代表例である (中村敏著『世界宣教の歴史 エルサレムから地の果てまで』いのちのことば社 2006 年 119～130 頁)。バーネットもこの団体とのつながりをもっている。

(13) 1903 年夏 C.M.S. の宣教師 B.F. バックストン (Barclay Fowell Buxton) と彼の島根県松江伝道の協力者 A.P. ウィルクス (A. Paget Wilkes) がイギリスの教職、信徒の協力で作ったワンバイワン・ミッションの日本支部を翌年日本伝道隊とした (日本キリスト教歴史大事典編集委員会編集『日本キリスト教歴史大事典』教文館 1988 年)。

(14) 「自伝」で学生時代に「買い物や他の用事のためにロンドンに行ったとき、私の乗った列車は東ロンドンの非常に貧しいスラム街のところを汽車で通り、私はそういう所に入って働きたいと思」ったと述べている。これは「私の心は英国の田舎の紳士気取りの高慢さを嫌悪しました。教区の牧師 (parsons), 大地主 (squires), 地主紳士階級 (landed gentry), そしてわずかにいる一時成金 (a few nouveau riches) は借地農 (farmers) とは違う世界に住んでいて、借地農も労働者 (labourers) と再び通い合うことができない障壁によって分かれたっていました。それはインドのカースト制度よりも硬く拘束力がありました」との認識にある。この思いの原型は幼児期ノーフォークの農村地帯の階級社会の記憶まで遡れるだろう。

ここでいう「C.P.A. Deaconess」は、「C.P.A.」を「Certified Public Accountant」の略とすれば公認の会計担当執事ということであろうか。Christian Police Association の略も可能か。

(15) ウィルクス三度目の来日時 1910 年 4 月～1912 年 6 月の記録が『MISSIONARY JOY IN JAPAN —MY DIARY IN JAPAN by PAGET WILKES』として 1913 年ロンドンで出版されている。ここには高等批評の影響を受けた日本のキリスト教界の状況が記されており、こうした書物から日本の情報をつかんだと考える。本書は阿部赳夫訳『日本伝道日記』(いのちのことば社 1978 年) として日本語に翻訳、出版された。

(16) 東京のバーネットの住所は前掲注 (8) 「福音伝道教団史年表」(123 頁) による。

(17) 「The Central Japan Pioneer Mission. A PERSONAL TESTIMONY.」 「C.J.P.」 Vol. I . No.1 OCTOBER, 1925.

(18) 舟喜麟一「恩師の面影」舟喜麟一編『M.A. バーネット師の遺稿と生涯 今尚語る信仰の人』所収 福音伝道教団 1951 年 57 頁

バーネットの「気管支炎」は足尾での生活が原因か、もともとその傾向があったのかは不明である。舟喜麟一は 1889 年 3 月 28 日金沢に生まれ、石川県士族であり、1918 年日本伝道隊神戸聖書学校を卒業し伝道者となっている (舟喜麟一「履歴」「昭和 9 年「社寺 教

会講社」群馬県立文書館所蔵 行政文書 1232 2/3)。

(19)「The International Miner's Mission」のホームページ「<http://www.minersmission.com>」の History of The International Miners' Mission によれば、G.V.M.M.は、1906年に設立され、サセックス州ブライトン(Brighton)に本部を置き鉱山労働者を主な宣教対象とした団体、足尾は最初の海外宣教地である。

(20)バーネットの足尾着任について、前掲注(8)「福音伝道教団史年表」(123頁)では1920年2月18日としている。しかし足尾行きを決意したのが1919年春の年会であり、6ヶ月後の「雪の日」となると1919年11月または12月となろう。

(21)早乙女雅彦「バーネット先生の思出」『キリストの馨り M.A.バーネット師の追想』(以下『馨り』)所収 福音伝道教団 1951年

本書はバーネット召天後、ほどなく発刊された回想集である。

(22)「A Retrospect. by Miss Burnet」 「C.J.P.」 Vol.III. No.6. February, 1928.

C.J.P.M.の2年半の宣教を振り返り「長い間の偶像崇拜と迷信の込み入った藪とみなされる処女地を耕しているか、今までキリスト教が誤って伝えられているので、何も試みられていない場所より実りが少ない所でキリストを知られるように努めているかです」としている通りである。なおバーネットが見たであろう1921年版『基督教年鑑<復刻版>』(日本図書センター 1994年)の栃木県分(106~108頁)には足尾教会の記載はない。

(23)「THE LATE Rev.Charles Inwood, D.D. A Tribute from Japan. By MISS BURNET.」 「C.J.P.」 Vol. IV. No.2. February,1929.

これはインウードの死に際し弔意を表す記事で、彼の来足の時「私に最も深く印象づけられたのは、根本主義の理想への彼の尽きない忠節でした」とバーネットは述懐している。なお、「Tent Mission」は、「天幕伝道」を慣用表記としているので、以後これを使用する。

(24)前掲注(22)「A Retrospect. by Miss Burnet」

(25)「暫定協定」とは「足尾の伝道に余分が出れば、開拓伝道のために使用してもよい」(吉村房次郎「福音伝道教団の源流をたずねて④」 「神の福音」第365号 1981年3月)というG.V.M.M.の承諾があったとする言い伝えがある。このことであろうか。

(26)「AT THE CRADLE OF THE C.J.P.M.」 「C.J.P.」 Vol. XVII. No.4. NOVEMBER,1947.

(27)天幕伝道の期間は前掲注(8)「福音伝道教団史年表」(124頁)による。「Laying the Foundations The Opening of Ota.」 「C.J.P.」 Vol. I. No.1.OCTOBER,1925.では2週間としている。この天幕伝道に出席、後に伝道者となった小澤貞子(旧姓橋本)は、それまで通っていた教会の牧会者は「キリスト様の神性を信じない方で、罪の話も救いの恵も、一度も語つて下さらず、主イエスの人格とか、道徳とか、人類の模範とか、又先覚者の悲哀とかゆうお話ばかりでした」(小澤貞子「信仰の母」前掲注(21)『馨り』所収)と証言している。この記憶が正しければ自由主義神学の影響がこの地域に及んでいたこととなり、バーネットが主張する「霊的荒廃」を裏付ける。

(28)小澤貞子「教会紹介 太田キリスト教会」 「神の福音」1977年12月号

(29) 「Laying the Foundations The Opening of Tatebayashi.」, 「C.J.P.M. Notes. 1, Our Ebenezer.」及び「A SEEKING BUDDHIST PRIEST」 「C.J.P.」 Vol. I . No.1. OCTOBER,1925.

「C.J.P.」1926年10月号まで舟喜, 佐野ら C.J.P.M.の伝道者に「J.E.B.による貸与(lent by J.E.B.)」と記載されていた。翌年1月号からはこの表記は消える。

(30) 前掲注(18) 舟喜麟一「恩師の面影」56頁

(31) 「Letter from Miss Burnet. “Berachah” Nyack, New York. June 5th 1926.」 「C.J.P.」 Vol. I . No.4. JULY,1926.

訪れたニューヨークのヘブジバ・ハウス(Hephzibah House)「そこは主が私に最良の幾人かの聖徒たちと礼拝の清められた時を与えてくださり, 彼らを通して宣教団のために扉を開きはじめた場所」としており, 帰英途上新宣教団設立のために活動したことが分かる。

(32) 前掲注(8)「福音伝道教団史年表」(124頁)に「法規にもとづいて C.J.P.M.を設立」とある。保証人には東京でジョージ・ブライスウエイト(George Braithwaite)が, イングランドでチャールズ・インウッドが就いた(「C.J.P.」 Vol. I .No.1. OCTOBER,1925.)。

(33) 創刊号からの「C.J.P.」に「EVANGELICAL AND UNDENOMINATIONAL. Working in Association with the Japan Branch of Glynn Vivian Miner's Mission」とある。

(34) 前掲注(4)「Principles」

バーネットの信仰体験と重なる。彼女の聖霊論は「平民の神学」(前掲注(18)『M.A. バーネット師の遺稿と生涯』所収)にある。「協会」規則では第五項「贖罪」に「聖霊に由れる新生, 心情の純潔, 聖霊の盈満」云々と信者に内住する聖霊の働きを記している。

(35) 「Progress at Ojima.」及び「THE TENT MISSION AT SAKAI.」 「C.J.P.」 Vol. I . No.1. OCTOBER,1925.

尾島の製糸工場伝道は拙稿「福音伝道協会のキリスト教伝道と製糸工女—宣教報告「The Central Japan Pioneer」による—」(『群馬文化』319号 2014年 39~41頁)を参照。

(36) 「C.J.P.M. Notes. 2. Prayer Circles.」 「C.J.P.」 Vol. I . No.2. JANUARY,1926.

既存の祈りのサークルの中に C.J.P.M.への祈りが加わった。

(37) 「C.J.P.M. Notes.」 「C.J.P.」 Vol. I . No.4. July,1926.

(38) 前掲注(31) 「Letter from Miss Burnet. “Berachah” Nyack, New York. June 5th 1926.」

この手紙はニューヨークにあるキリスト者同盟の創始者 A.B. シンプソン(Albert.B.Simpson)の墓地に訪れたときに書かれた。

(39) 「Letter from Miss Burnet. Los Angeles, September 7th, 1926.」 「C.J.P.」 Vol. II . No.1. OCTOBER,1926.

(40) 前掲注(31) 「Letter from Miss Burnet. “Berachah” Nyack, New York. June 5th 1926.」

(41) 「FIELD NOTES BY SUPERINTENDENT. 2.Field Organisation.」 「C.J.P.」 Vol. II . No.2. JANUARY,1927.

「信仰の純潔保持のために, 日本名「福音伝道協会(Fukuin Dendo Kyokwai)」, “Gospel Evangelical Alliance” として知られる一つの同盟として形成されます」 「C.J.P.M.の働きの

結果としてできた教会は完成された形で、新約聖書に示された独立、自治の教会となるでしょう」としている。1927年1月帝国議会提出の宗教法案は、3月審議未了廃案となった。

なお、館林教会が1926年12月23日、福音伝道協会最初の県認可教会となっている（「教会規則認可申請書」『昭和17年教会規則』群馬県立文書館所蔵 行政文書 簿冊番号昭1618）。

(42) 「Our First Annual Meetings」 「C.J.P.」 Vol. II. No.4. JULY, 1927.

英文表記は「the Priestly Work to which we were called as members of a Pioneer Mission」, ここでバーネットは「その時までにはいたる聖導と経緯を語」ったという（小島伊助「バーネット師を送る」前掲注(18)『M.A.バーネット師の遺稿と生涯』所収）。小島は舟喜麟一の日本伝道隊神戸聖書学校の同級生で、「巡回講師」として、しばしば C.J.P.M.の年会や修養会、天幕伝道などの講師として招かれた。

(43) 前掲注(5)「福音伝道協会規則」第十一条「外国ミッションとの関係」

舟喜麟一の「協会」での立場は「年会議長」（第五条第九項）である。1934年2月の規則訂正で年会議長は「理事会の理事長たるべし」（第五条第五項）となる。C.J.P.M.での立場は「C.J.P.」1927年1月号から示される Chairman of Field Conucil である。

(44) この前橋教会（朝日町3丁目20-20）は現在単立教会で（「群馬県宗教法人名簿」2012年2月）、日本福音キリスト教会連合所属である。バーネット召天1年8ヶ月後1953年3月の「協会」年会に前橋教会（牧師舟喜麟一）から脱退通知文が提出された。同年6月には清王寺町124番地（現在日吉町2丁目10-10）に戦後建設された聖書学寮が、前橋教会として福音伝道協会に加入、これが現在の福音伝道教団前橋教会である（前掲注(8)「福音伝道教団史年表」144頁）。なお、朝日町（旧百軒町）の前橋教会が福音伝道教団との「被包括関係の廃止の公告」確認書が提示されたのは1955年8月31日である。

(45) 「A Letter from Miss Burnet. 1603. Kaji Cho Tatebayashi, Gumma Ken.」 「C.J.P.」 Vol. II. No.4 July, 1927.

前橋伝道の詳細は前掲注(35)「福音伝道協会のキリスト教伝道と製糸工女」（38, 41～43頁）参照。

(46) 吉村房次郎「神と偕に歩みし先生」前掲注(21)『馨り』所収

(47) M.A.バーネット著『ロマ書註解』福音伝道教団 1956年 12頁

本書はバーネットが戦時抑留中の1942年1月頃から前橋百軒町の宣教師館で執筆、翻訳され、匿名で「福音伝道新誌」1942年8月号から連載が始まった。

(48) 市川惣蔵「教師としてのバーネット先生」前掲注(21)『馨り』所収

(49) 小澤貞子「信仰の母」前掲注(21)『馨り』所収

(50) 「The First Fruits of Maebashi.」 「C.J.P.」 Vol. IV. No.1. November, 1928.

(51) 石井正編集『M.A.バーネット先生選集』第3巻 1974年 「十誠」 90頁

1932年9月から翌年9月まで前橋の聖書学寮でバーネットの講義を聴いた石井正が、戦後当時の筆記ノートをもとにまとめた。

(52) 「The Old Order Changeth. Part2 THE GOVERNMENT TURNS TO SHINTOISM FOR HELP」 「C.J.P.」 Vol. II. No.1. October, 1926.

この記事は匿名であるが「宗教的であることを止めた神道、または天皇の写真の前でのお辞儀はキリスト者の信仰告白に矛盾しないものでした。時々私たちはこれがリバイバルの遅れる理由の一つではないか」としている。

(53) 「A Joyful Day at Haniu」 「C.J.P.」 Vol. III. No.8. August, 1928.

(54) 前掲注(22) 「A Retrospect. by Miss Burnet」

(55) 「A Letter form Miss Burnet. Tatebayashi, Gumma Ken. Japan, June 14th, 1928. 」 「C.J.P.」 Vol. III. No.8. August, 1928.

(56) 「Australasian Notes」 「C.J.P.」 Vol. IV. NO.5. NOVEMBER, 1929.

(57) 「A Letter form Miss Burnet. Leicester. October 8th, 1929.」 「C.J.P.」 Vol. IV. NO.5. NOVEMBER, 1929.

(58) 「Christmas in Maebashi」 「C.J.P.」 Vol. VI. NO.1. NOVEMBER, 1931.

(59) 受洗者 92 人は「A Retrospect. by Miss Burnet」 「C.J.P.」 Vol. III. No.6. February, 1928., 受洗者 420 人は「1925－1934」 「C.J.P.」 Vol. IX. No.1. February, 1934. による。

(60) 佐藤賢著『國民國防同盟會記念録』國民國防同盟会 1935 年 38 頁

同会は「満蒙既得權益確保並ニ權益確保ヲ持テ満蒙移民ニ對スル積極的政策ノ確立ヲ期ス」ることを目的とし、「新兵器充実費の援助」「出征兵士並ニ其家族ノ慰問」などを事業とした(「会則」同書 27 頁)。

(61) 拙稿「昭和の戦争とキリスト教」『群馬文化』第 323 号 2015 年 21～25, 32～33 頁

(62) 前掲注(51) 『M.A.バーネット先生選集』第 3 巻 118 頁

引用したのは「実際問題として信者が戦争参加拒否をすれば、獄に入れられるか、または死であります。そうでないならば間接に戦争を助けていることになります。背後にあって働いていれば、間接的に戦争に参加していることになります」とした後である。「百卒長が来ても主イエスは、その職業を変えよとは言いませんでした」とも述べている。

(63) 「Facts and Visions」 「C.J.P.」 Vol. VIII. No.1. February, 1933.

(64) 「Field Notes. By The SUPERINTENDENT.」 「C.J.P.」 Vol. VII. No.1. February, 1932.

「1932 年、私たちは空っぽ財政でスタートしています」「最初の数ヶ月増加しなければ、働きを縮小しなければならないでしょう」と述べている。信仰宣教団体 C.J.P.M. は「原則」で「奉仕者には保証された給料はありません」としていて資金面の不安定さがあった。

(65) 前掲注(59) 「1925－1934」

「経費削減」の例では、ニューヨークに宣教本部を置くキリスト者同盟宣教団(The Christian and Missionary Alliance Mission)がある。その宣教師の一人メーベル・ルース・フランシス(Mabel Ruth Francis)によれば、帰国勧告は 1934 年のことであったという(メーベル・フランシス著『ひとりが千人を追う』いのちのことば社 1969 年 28～34 頁)。

(66) 「Deputation Work.」 「C.J.P.」 Vol. IX. No.2. May, 1934.

(67) 「Field Notes BY THE SUPERINTENDENT.」 「C.J.P.」 Vol.IX. No.3. August, 1934.

Miss トマス (Miss Grace Thomas) は 1931 年イギリスから来日した宣教師である。

(68) 「Field Notes BY THE SUPERINTENDENT.」 「C.J.P.」 Vol.X II. No.4 Nov., 1937.

フィラデルフィアの Berachah Church の共同牧師 (Co-Pastor) のハーバード・フォッグ (Herbert Hogg) の死を知らせで、彼は「近年結成されたアメリカの諮問評議会の議長」であったとした。「C.J.P.」同年 5 月号に彼を含む諮問評議会のメンバーが紹介されていた。

(69) 「A LETTER FROM MISS BURNET Ealing, January 23rd, 1936.」 「C.J.P.」 Vol.X I. No.1. February, 1936.

(70) 「開拓に使して」 「福音伝道新聞」 1936 年 8 月号

新潟伝道開始に際し「この県においては福音主義の宣教師はいず、the simple Gospel を伝道する日本人の福音的伝道者はほとんどいません」(「IN NIIGATA THE TIBET OF JAPAN」 「C.J.P.」 Vol.X. No.2. May, 1935) と紹介していた。the simple Gospel とは「協会」機関誌にしばしば見られる「純福音」の英句ではないか。

(71) たとえば「攻撃せんが為の攻撃、今も昔も變りがない。悪魔呼ばわり、非国民との悪聲は珍しいことでない」(「マタイ傳略解卅五」 「福音伝道新聞」 1935 年 5 月号) の「今も」が迫害あることを示すであろう。

(72) 「1938—AN ENCOURAGING YEAR」 「C.J.P.」 Vol.XIV No.1. Feb, 1939.

この記事でさらに「1,309 円 06 銭は二つ目の聖書学寮と協議会館の建設のために、いつでもこの目的のために十分な資金が手元にあります。戦争のために使われている建設資材の巨大なコストの値上がりは、4 から 5 度の建設の試みを不可能にさせています」とした。

(73) 舟喜生「祈祷せよ」 「福音伝道新聞」 1937 年 9 月号

(74) 「福音伝道新聞」で報告されたものに限るが、1938 年 4 月号「消息」 「北支に於て病死」とした大間々教会の信者の戦病死の記事が最初であろう。

(75) エフ生「主の僕を迎ふ」 「福音伝道新聞」 1939 年 7 月号

(76) 前掲注(61) 「昭和の戦争とキリスト教」 28～29 頁

(77) 「WATCHMAN WHAT OF THE NIGHT」 「C.J.P.」 Vol.XIV. No.4. Nov-Dec., 1939.

(78) 前掲注(77) 「WATCHMAN WHAT OF THE NIGHT」

「経験は戦争と圧政の時代が最も偉大な外国宣教の発展の時代であることを示しています。近代の宣教運動はナポレオン戦争の時代に起こりました。確か、中国内地伝道は先の世界戦争の間収入は倍になりました」とも述べている。

(79) 「FIELD NOTES by the Superintendent Shortage of workers」 「C.J.P.」 Vol.XIV. No.4. Nov-Dec., 1939.

(80) 「AN UNUSUAL GOSPEL SERVICE」 「C.J.P.」 Vol.XIV. No.4. Nov-Dec., 1939.

(81) 「消息」 「福音伝道新聞」 1939 年 12 月号

(82) M.A.バーネット「キリストを衣よ」 「福音伝道新聞 伝道版」 1939 年 12 月号

(83) 「WAR AND MISSIONS」 「C.J.P.」 Vol.XV. No.3. AUGUST, 1940.

(84) 舟喜生「事ふる生涯」「福音伝道新聞」1940年7月号

(85) 舟喜生「切願」「福音伝道新聞」1940年3月号

「宗教團體法は公布され、勅令出て、省令も又完備し、昭和十五年四月一日より實施する」「これがために教團規則の改正組織の整備、陣容の充實等、劃期的な改變を要する年會は眞に重要である」としている。

(86) 日本基督教団宣教研究所教団資料編纂室編『日本基督教団資料集 第1篇 日本基督教団の成立過程(1930～1941年)』日本基督教団出版局 1997年 149～150頁「日本福音ルーテル教会教団規則作成の過程 総会議事録6 諸報告」

(87) C.J.P.M.ではカナダ出身の宣教師ポール・ランバル(Paul Rumball)が、この頃帰国している(「上毛新聞」1941年3月26日付)。教派合同ではたとえばバーネットが属していたJ.E.B.に起源を持つ諸教派は合同し、1940年11月日本伝道基督教団を結成した。

(88) 「CAN FOREIGN MISSIONS STILL CONTINUE IN JAPAN」 「C.J.P.」 Vol. X VI. No.3. Aug., 1941.

この記事はバーネットが当時のキリスト教界の動向をまとめ分析したものである。引用文は1940年10月17日青山学院で開催された「皇紀二千六百年奉祝」全国基督教信徒大会の宣言文にある「吾等は全基督教会合同の完成を期す」を指しているのであろう。彼女はこの動きを「日本基督教聯盟(The National Christian Council)」が起こしたとしている。前掲注(87)で示した日本伝道基督教団は日本基督教団創立時、これに参加している。

(89) 宗教結社「教団規則」(1941年4月1日 福音伝道協会)が残されている。宗教結社は地方長官(知事)への届け出制であるが、「協会」が実際に届け出たか、届け出が受理されたかは不明である。なお、自給については1941年3月号「福音伝道新誌」「回顧」の記事末尾に「(全自給を前に)」とあるので翌月から自給となったと考える。1939年12月末現在で、26教会の内自給教会は6であり、自給体制をとることは困難を伴った(前掲注(61)「昭和の戦争とキリスト教」30～31頁参照)。

(90) 「福音伝道新誌」1941年2月号

「主許し給わりし八月まで各地の巡回を終り日本に歸へらるゝ豫定」とある。

(91) (92) 前掲注(88) 「CAN FOREIGN MISSIONS STILL CONTINUE IN JAPAN」

(93) 前掲注(89) 宗教結社「教団規則」第五十六條

(94) 前掲注(88) 「CAN FOREIGN MISSIONS STILL CONTINUE IN JAPAN」

(95) 「IMPORTANT」 「C.J.P.」 Vol. X VI. No.4. NOV., 1941.

この記事で可能な送金方法を海外の支援者に知らせているが、この号は戦後「もし届いているとしてもごくわずか」(「C.J.P.」 Vol. X VII. No.2. MAY, 1947.)と述べており、送金ではなかったであろう。「C.J.P.」は1937年5月号から東京で印刷していた。

(96) 「THROUGH THE WAR YEARS IN JAPAN」 「C.J.P.」 Vol. X VII No.1. February, 1947.～ Vol. X VII. No.3. August, 1947.

これはD.A.パーの死後『神の賜物 ドロシー・A・パー師記念誌』(D.A.パーを支える会

1999 年)に「第二次世界大戦下の日本で」との題で翻訳され、収められた。

(97)『横浜市史 2 第 1 巻(下)』1996 年 997 頁

(98)「fear」 「C.J.P.」 Vol.XVI. No.4. NOV. 1941.

(99)「上毛新聞」1941 年 11 月 22 日付 オーストラリアのシドニーはトマスの「生れ故郷」と記している。この時期でも出国の手段はあったことになる。

(100)群馬県内に限るが、日本基督教団に加入した教会は 13 教会中 7 教会で、6 教会は 1942 年 3 月末日付で解散した(「昭和 17 年 寺院教会設廃」「教団ニ属セザル基督教会解散ニ関スル件」群馬県立文書館所蔵 行政文書 簿冊番号昭 1633)。

(101)前掲注(88)「CAN FOREIGN MISSIONS STILL CONTINUE IN JAPAN」

(102)小宮まゆみ著『敵国人抑留 戦時下の外国民間人』吉川弘文館 2009 年 98～101 頁、フランス系カナダ人の二人の神父とは、表 5「埼玉抑留署名簿」の No.19「アーネスト・カスグレン」(エルネスト・カスグレン(Fr.Ernest Casgrain)) No.21「マリエン・ボネ」(マリアノ・ボニ(ボナン)(Fr.Marianus Bonin))であろう。二人は前橋で抑留された後東京や埼玉の抑留所に移送され、1943 年 9 月 13 日、第二次日米交換船帝亜丸で帰加した(2016 年 5 月カトリック桐生教会司祭土屋和彦談及び『からしだね カトリック桐生教会献堂五十周年記念誌』カトリック桐生教会 1988 年)。

(103)内務省警保局 復刻版『外事月報』第 4 巻 不二出版 1994 年 36 頁 「抑留の本旨」及び『同』第 5 巻 5～6 頁「抑留者の移動」

パーネット、パー及びネトルトンの抑留理由は、「検挙すべき者以外の外諜容疑者」となっている。抑留解除後も容疑が晴れたわけではない。

(104)前掲注(102)『敵国人抑留 戦時下の外国民間人』79～82 頁

(105)「祈りの友へ」前掲注(96)『神の賜物』所収 64～69 頁 1945 年 10 月付 パーネットとパー連名の手紙である。

(106)前掲注(105)「祈りの友へ」

(107)中村茂著『草津「喜びの谷」の物語 コンウォール・リーとハンセン病』教文館 2007 年 73 頁

パーはハンセン病が「発病していない子供達のホーム」(D.A.パー「回想録」前掲注(96)『神の賜物』所収 42 頁)と記している。

(108)「座談会(身邊記)」前掲注(21)『馨り』所収

(109)前掲注(105)「祈りの友へ」

(110)2013 年 10 月、日本聖公会草津聖バルナバ教会司祭松浦信氏の聞き取りによる。

(111)前掲注(96)「THROUGH THE WAR YEARS IN JAPAN」

パーの証言では終戦 2 ヶ月後前橋に戻り、翌日には進駐軍が前橋にいたことが分かり、彼女たちの必要を知ると有り余るほどの物資を運んできたという。

(112)以上の引用は前掲注(105)「祈りの友へ」からである。

(113)前掲注(107)D.A.パー「回想録」43 頁

(114) 「CENTRAL JAPAN PIONEER MISSION (Founded 1925)」 April, 1946. 45 Loveday Road, Ealing, London, W.13. Yours in Christ Jesus, M.A.BURNET.

「Dear Friends and Prayer-helpers」とあり、支援者向けの手紙である。英文は未見ではあるが前掲注(105)「祈りの友へ」もその一つであろう。

(115) 「NOTES FROM THE HOME BASE」 「C.J.P.」 Vol. X VII No.1. February, 1947.

(116) 「An Open Door for the Gospel」 「THE MORNING COMETH AND ALSO THE NIGHT」 「C.J.P.」 Vol. X VII No.1. February, 1947.

(117) 「THE UNIQUE OPPORTUNITY IN JAPAN」 「THE MORNING COMETH AND ALSO THE NIGHT」 「C.J.P.」 Vol. X VII No.1. February, 1947.

(118) 「GOOD NEWS FROM OUR WORKER」 「ANNUAL MEETINGS」 「C.J.P.」 Vol. X VII No.2. May, 1947.

(119) 「JOTTINGS」 「C.J.P.」 Vol. X VII No.2. May, 1947.

(120) 「A LETTER FROM MISS BURNET August 21ST 1947.」 「ANNUAL MEETINGS」 「C.J.P.」 Vol. X VII. No.4. NOVEMBER, 1947.

(121) 前掲注(26) 「AT THE CRADLE OF THE C.J.P.M.」

(122) 前掲注(120) 「A LETTER FROM MISS BURNET」 「GENERAL CONDITION IN JAPAN」

(123) 前掲注(120) 「A LETTER FROM MISS BURNET」 「MAEBASHI」

(124) 前掲注(61) 「昭和の戦争とキリスト教」 25 頁～30 頁

例えば戦争の過程で生まれた出征家族とそうでない家族との意識の差、これは戦死、戦病死などでより複雑な乖離を生み敗戦により固定化した。

(125) 小島伊助「バーネット師を送る」前掲注(18)『M.A.バーネット師の遺稿と生涯』所収 47 頁

(126) 「臨終記」前掲注(21)『馨り』所収

(127) 「前橋だより」 「神の福音」 38 号 1951 年 7 月号

(128) 舟喜ふみ「母のような先生」前掲注(21)『馨り』所収

(129) 拙稿「昭和初期キリスト教を受け入れた人々ー福音伝道協会機関誌の信者の証言を中心としてー」『群馬文化』301 号 2010 年

(130) 戦前の C.J.P.M.の新潟伝道は戦後カナダ系の日本伝道ミッションが引き継いだ(前掲注(1)『日本における福音派の歴史』113, 185～186 頁)。

Abstract

**A life of England missionary Marguerite Amy Burnet ;
A pioneer mission of “the Central Japan” in Taisho ・ Showa period
and the process of forming Fukuin Dendo Kyokwai**

Hiromi FUKUDA

I would like to show the life of Marguerite Amy Burnet in this study. She came to Japan in 1917 as a missionary of the Japan Evangelistic Band and evangelized in “the Central Japan”, which includes Tochigi, Gumma, and Saitama Prefecture, etc. It was an evangelic faith which was to believe the Bible as it is that she brought to Japan. Her Missionary work was at the mercy of The Great Depression and The Second World War, however she did not give up evangelizing Japan until her death, Then former Fukuin Dendo Kyokwai changed its name — Fukuin Dendo Kyodan. It has 55 churches or stations for mission in the area of formerly named “the Central Japan”.